

會



報

1956年5月

186

日本山岳會

ネパールの国情

将来の遠征のために

村木庸益

本隊到着以後のカトマンズにおける隊の仕事は面倒なわずらわしいことばかりであった。将来のヒマラヤ登山というのを考えると反面実に興味深い事柄であった。クリシュナ氏と隊との問題、ネパール政府と印度政府、リエゾン・オフィサー（昨年より政府派遣の正式のものとなつた）とシエルパ特にサーダーとの問題、これらの対立が全部隊の処理すべき負担としてかかつて来たのだ。逆にいえば外交機関というものを持たぬ日本隊がこれらのわずらわしさにまきこまれたものといえよう。当初の問題であつた荷物の通關輸送などは一応法制化したネパール・ボンド・プロセデューアによつて若干時間をかけさえすればさしたるトラブルなしにスムーズに運ばれるが、前記のような問題になると山登りしか考えていないような単純な頭には少し荷がかり過ぎるようだ。

まず最初に問題になつたのは印度の地質調査所レイナー氏の本隊同行の件である。三月四日外務大臣に会つた時は単なる儀礼的挨拶でサマの問題は全く心配しないでよいという程度の話であつたが、三月五日フォージン・セクレタリー、ミスタ・サバに会つた時サマの問題に引つづいて横隊長からレイナー氏同行の件を既知の事実として話したところ、彼は日本隊にはマナスル旅行を許可しているが彼のことは何ら聞いていない、もし彼を伴うならば日本隊として何故前もつてアプリケーションを出さないか、また彼が単に日本隊の後を追うというのであれば彼自身として許可を受くべきで、日本隊の許可とは全く別問題である」と一本釘をさされた。横隊長始めわれわれの解釈は昨年の先遣隊が印度地質調査所のソンディ博士がこの依頼によつてサマまでつれていつてやるというものであり、当然印度政府よりネパール政府に申し入れがあつたはずと考えていたところ意外な故障がおこつたのである。元来全然別の目的を持つたしかも他国人を同行することは隊にとつてはむしろネガティブ・ワイクであり、あくまで友好的な好意によるものであつたので一応レイナー氏がカトマンズに来てから相談することに引上げたのであるが、翌日レイナー氏に会つて聞くと、ネパールの印度大使館はすでに先月末通告済みだとのことであつた。

ちょうど横隊長が印度大使館で二等書記官ラサガトラ氏に会われてレイナー氏を同行する旨の手紙に署名され（ネパール政府あて）レイナー氏と共に再びフォージン・セクレタリーに会うと、向うは正式な印度政府の依頼状をミスしていたことにあつてると同時にそれはねかえりが日本隊にかへつて来た。即ち印度大使館の公文による日本隊からの要求によつて地質調査所員一名を同行させるということになつているのだから、日本隊がレイナー氏の名前を入れてマナスル登山の申請をしなかつたのは手落ちではないかという話なのだ。元来東京を出る時は、誰が一諸についてくるかわからなかつたのにアプリケーションの出しようもないし、前述の通りこちらからたのんだ覚えはさらさらない横隊長はすっかり憤慨されてレイナー氏にその公文が誤りであることを指摘され、彼も十分そのことは承知していたのであるが、口答では如何ともしがたく——というのは横隊長署名のレイナー氏をつれてゆくという手紙と印度大使館からネパール政府への公文の趣旨が全く反対で問題は非常に複雑なものとなつてしまつたのである。このくらいではわれわれの出発許可さえもらえそうもないので三月八日の夕方フォージン・セクレタリーの内意をうけたクリシュナと話し合ひの末日本隊はレイナー氏を同行することを断念するという手紙を書かざるを得ないような状態であつた。

結局ネパールの少壮官吏並に青年層の印度に対する反感が弱点である日本隊に向つて爆発したようなもので、彼らも表向き印度に対して反対を表明出来ないでいるが内攻の程度は相当なものである。たとえ毎日グラフに出ていた足立源一郎画伯画くところのマナスル登頂想像図に印度国旗がついていことに對する憤慨ぶり、われわれの荷物が印度大使館の検査をうけなければならぬことに對する反感など相当なものがある。国連加盟という点からいえば日本より一步先んじているのだから、われわれもあまり大きなことはいえないが小国のナショナリズムをつくづく感じさせられた。印度とネパールの間の問題をわれわれの責任にして押えつけることもないと思うのだが、小国の悲しさ、外交官を持たぬ日本隊へのあてつけになつてあらわれたと見るべきであらう。

しかしこの問題は翌日の朝、印度大使館が例の公文は間違ひであり「自分の方から日本隊に同行を依頼したのだ」と訂正したため無事解決、レイナー氏も晴れてわれわれと同行出来ることになつたのである。

次にポーターの件、これにはクリシュナーとの関係、シエルパ、リエゾン・オフィサーとの対立がからんでいる。先発隊が到着してすぐサーダーとサガ氏、ローカルポーター・サーダー（パサン・プタール）の三人を呼んで今回のポーター募集に関してはローカルポーター・サーダーに一任するという話をしたのは前に記しておいたが、三月八日外務次官（フォージン・セクレタリー）に会つて帰りがけにクリシュナが今度からシエルパはポーターを集めてはいけない規定になつたという、サガ氏にたまたま彼も寝耳に水、きよう始めて聞く話だが、外務省の通達だから仕方がないといふ。これでは如何にも日本隊へのあてつけとしか考えられないではないか、実はこの通達をうけるまでは横隊長並に私のところへクリシュナから一部のシエルパ達の面白かぬ噂とか、昨年ウエールズの遠征隊がおこした現地人に対する侮辱事件（私はクリシュナよりの話、

植隊長はヘンダーソン夫人よりの話で知っておられたが、実際の新聞記事をみないので詳細不明)なことをくどくどのべ、なぜこんなことを話すのか少し疑問に思つたところであつた。実は今年度は会計を少し厳重にやつて松田がクリシュナに依頼したサバ家における生活費一切に対しても領収書をびしびし取り上げ不明瞭な点をよしやしなかつた。少し高すぎるようなものはシエルパのゴックに相談して追求するという有様で彼は私にあつたり小原さん(三月七日残留荷物を通關してチャター機で到着)に会うと自分のハートは病むというような表現で盛んにこぼしていた。こんなこととポーター募集にはタッチやがらせということがからんでいやがらせというのとタカをくつていたのだ。ところが前述の妙な通告になつてあらわれ、さらに驚くべきことには外務省のデビュティ・セクレタリー、N・V・シンから公文を寄こして、ローカル・ポーター・サダー、バサン・ブタールは面白からぬ人物だから隊に加えることとなく早速家郷へ帰すようにという勧告をして来たのだ。本人は一九五〇年イタリア隊のアビ峰の際に手の指を凍傷で切断しているがサダー、ギャルツェンの兄で実には好人物で信頼出来るシエルパと感じていたのでわれわれはすつかり驚ろいてしまつた。よく調べてみると一九五五年ロートツの国際登山隊(デイレントフツ隊)のサダーでその際若干問題を起したことがわかつた。しかし責任はむしろ隊ならびにリエゾン・オフ

イサーの方にあらうらしい、リエゾン・オフイサーが無暗に権力をふるまわしシエルパの故郷であるナムチエでシエルパやポーターの賃金切り下げを強行しようとしたのだからトラブルがおこるのが当然である。何が原因かはつきりしたことはわからないが、リエゾンがビストルを振りまわしてサダー・バサン・ブタールと論争し、バサン・ブタール、アンツェリン・IV(一九五四年参加)ヘラクパツェリン(一九五六年第二ゴック)を解雇してしまい、憤慨したバサン・ブタールはあずかつていたポーターの賃金を持つてダージリンのロイド銀行に預金し解決をテンジンにゆだねたという事件である。これが非常に悪く政府側に伝えられポーター賃のピンハネと誤解されていることなどが明らかになつたこのため今年のスイス隊(ロートツエ)はナムチエにリエゾン・オフイサーを伴うことは紛争の原因となつてその同行をネパール政府に謝絶したほどであるが、この一因のリエゾン・オフイサー達(ドイツ隊アンナブルナ、国際登山隊ロートツエ)がネパール・マウンテニアリング・クラブなるものを作つてエクスペジションのあつせん、ポーターの契約その他やつてシエルパに張合おうとしていることがからんでバサン・ブタールをすつかり悪者にしてしまつたわけなのである。この件にまつたわけきごろテンジンがカトマンズに来て一応釈明したということであるが、人夫募集をシエルパの責任において行おうとしたわれわれに対してしわ寄せが来たとみるべきであらう。

ネパール登山協会なるものも登山実践の団体ではなくヒマラヤ遠征隊に人夫を世話してそのピンハネによつてぼう大な利潤をあげるというこのほうが主目的であるらしく、将来はこの点でますますシエルパとの間にあつたきをおこすであらうし、シエルパ自体もテンジン以来シエルパ・アソシエーションを作つて、永い伝統あるヒマラン・クラブから自立し、一応しつかりした基礎を持つたかに見えるが、相互扶助のためとは自分自身の給料から相当額をアソシエーションにおさめなければならぬし、仕事にそれに伴うだけあるかどうかという点から案外早く内紛がおこるかも知れないような気がする。少くともカトマンズを通過するエクスペジションは将来ますますこういうたぐいのトラブルにまきこまれる可能性があふると覚悟せねばなるまい。まして外交機関を持たぬ日本の場合には印度大使館、カトマンズ政府それぞれ独立に交渉せねばならぬ仕事を持ちトラブルの解決は隊自体の力によらねばならぬのだから相当面倒だと考えねばならぬであらう。

話が少し横道にそれたが、バサン・ブタールの件については先の印度地質調査所員同行の問題が解決した後もう一度外務省で問いたずと手紙のような強い意志はなく、あくまで忠告であり探査は植隊長に一任するという返事を得た彼が実際陰険な人物であるならば考慮する必要があるが、前述の如く信用に足るシエルパであり、ここで若し日本隊が彼を解雇でもすれば恐らく将来再びヒマラヤ遠征に参加する機会は失なわれて、シエルパとして完全に失脚してしまふことにならうという判断から、植隊長は断乎として彼をつれてゆくことを決定された。実はわれわれも最初の手紙の雰囲気から彼を帰さねばならないのではないかと、帰した場合のシエルパ達の動揺をどう処理したらよいかなどと頭を悩ましていたのであつたが、この決断を知つてはじめて明るい気持ちになれたのである。

一九五三年以来三度ネパールの土を踏んで仕事にもなれ、ネパールの間のびした空気にもどうやら耐えられるようになった反面、ネパール人の欠点は鼻につくばかりであり、荷物輸送がスムーズにゆくようになったと思うとこんなトラブルが起きて、常に何か新たな事件に直面しているのであるが、日本で考えていたようにネパールヒマラヤにおける登山が容易になつたということは軽率にいいない近い将来も決して簡単になることはなからうというのが私の感想である。ネパールというところは世話する人間が出てくればくほど金がかかり、ことが面倒になつてゆく国である。

マナスル登頂ついに成る

第三次マナスル登山隊

第三次マナスル登山隊はついに世界第八位の高峰マナスル(八一二五米)の頂上を極めた。五月十七日午後登山隊長横有恒氏からネパール政府にはいつた公電によれば、日本登山隊は好天に恵まれ第一登山隊今西寿雄、ガルツェンの二名が九日に、一日おいて第二登山隊加藤喜一郎、日下田英の二名が十一日にそれぞれ登頂に成功。ネパールでの戴冠式をかざつた。本会ならびに毎日新聞社の足かけ五年にわたる執拗な攻撃の反復はついにここに結実し世界登山史上に輝かしい一ページをかざつたのである。

去る四月一日BCより行動を開始した登山隊は最難関の水瀑を無事突破し、四月二十一日六六〇〇米の地点にCIV、二十一日六六〇〇米の地点を経ず正面の大きな斜面の中

マナスルとの闘い

C I の建設

大塚 博美

四月一日 今朝のテント場の出来事はなかなか傑作であつた。サマのラマ僧はじめ主だった人間が六人ほど、隊長、小原、スッパ、サーダー、通訳を囲んで例の四千ルピーの取引と種々の受取りにサリンしている。金はスッパが一時預るといつていたが結局はじかに受取つた。ただ五百ルピーだけはスッパが登山を終つた時に渡すとのことで彼が保管をする。

金は渡された。一枚一枚数えるラマの顔には僧としての面影より貧相な下賤なものしか映らない。三千五百枚の紙幣を数える風景はまさにナンセンスである。数多くの映画と写真がこの風景をキャッチする。正午にはどうやらこの取引も済み、一応この問題は解決する。

一方これとは別問題に第一回の荷上げは早朝から始められている。隊の根本方針としてBCよりナイケルまでの期間は主としてシエルパとポーターによつて荷上げをなし、隊員はこの間フリーに行動して山に馴れる。この期間で隊員は休養と高度馴化をすることになつてゐる。東京を出てからちようど二ヶ月、登山の序曲の荷上げの幕が切つて落とされたのである。七日、C I 偵察キャンプ設置までの荷上げの概要は次の通りであつた。

▼一日、シエルパ3、ポーター15、

メンズ18、498キロ（一人平均11サーブを除く・以下同じ）27・6キロ

▼二日、サーブ3、シエルパ14、ポーター16、メンズ33、706キロ（平均23・5）

▼三日、サーブ2、シエルパ16、ポーター15、メンズ20、274キロ（平均15・2）

▼四日、サーブ5、シエルパ17、ポーター16、メンズ37、874キロ（平均26・4）

▼五日、サーブ1、シエルパ15、ポーター15、メンズ31、820キロ（平均27）

▼六日、シエルパ2、ポーター18、メンズ20、457キロ（平均22・8）

▼七日、サーブ7、シエルパ15、ポーター20、メンズ35、900キロ（平均25・4）

BCよりナイケルまでへ約六トンの荷を上げる必要があり、今までの状況は極めて円滑に行われている。つまり一日平均約六五〇キロ、シエルパ、ポーター平均して二十五キロ、合計四五二九キロの荷が上がり、大体計画通りである。BCよりC I 下デポ地まで高さ一〇〇米、まことに息もつかせぬ登りまた登りで一番こたえるところである。三十キロ背負つて大休五時間かかっている。サーブは足ならしと私物の荷上げとで軽いトレーニングを物している。

しかしこの一週間にまた色々事件があつた。その一つは徳永ドクタール生神様となるのくだりである。

三日前、スッパの護衛の一人がドクターを早々と起しに来て子供

の具合が悪いからみてくれというので早速徳永は往診に出掛けた。昨度から四十度近くの熱でしきりとヒキツケをおこしたとのこと。

肺炎の診断を下しオーレオマイシンを注射し熱を下げる。午後三時ごろまでは殆ど快方に向つた。その二番目の子供は起きてテントのまわりで遊んでいたが急に再びヒキツケを起し目を白黒させ息をつまらせた。スッパは死近しと判断しラマ僧を呼びにやると同時に家族即党に息子の臨終を告げたよう

で、ワアワアと悲しみ叫ぶ声がテント場を圧した。そこで徳永は再び呼ばれて行き起死回生の手術をや

り見事子供の生命をとりとめたのである。スッパを始め奥さん、子供たちは本当に涙をこぼさんばかりに喜んだ。人間である限り人情に変わりはない。正に徳さんはここで生神様となり隊のために貴重な一点を稼いだのである。

話は變つて、今年のBCでは何かおかしな風邪が流行している。大して悪性というのではない。それほど高熱は出ず食欲はある。松田がアルガト・バザールで第一号となり、次にニヤツクで依田、今

西、BCに入つてからは殆ど全員小原、大塚がこじらして四日ほど不快な日を送つた。徳永ドクターも四日に熱を出して寝込んでしまつた。この風邪はシエルパにもうつりはじめ、イラナムギャルとアンテンパの二名が隔離テントでね

ている。

四日、きょうは隊長が足ならしにC I デポに上る。辰沼ドクター、千谷、村木、日下田も行を共にする。全く元気な隊長の姿をみ

てわれわれ一同は心から安堵の胸をなで下ろす。隊長の出馬によつて荷上げの序章は最高潮に達した毎日きまつたような快晴に眉を圧するマナスルを仰ぎわれわれは次に来るべき登高をひかえ悠々と自適している。

六日、休養日、隊長は全員を集めて今後の計画原案を提出して討議をする。それによると

①ナイケ・コルより上の中核体を経験年長者によつて組織し、隊長不在時はこれによつて運営する（小原、今西、辰沼、加藤、村木、ギャルツェン）

②ナイケ・コルの責任者（小原サブ千谷）

③アドバンス・B・Cについて（村木、大塚、徳永、日下田、松田）特に若い連中を中心にして今後をなせる。

④シエルパの運営（小原、今西、松田、ギャルツェン）

かくして各責任の骨子案は作られ、いよいよ七日からC I ヘテントを建設しナイケまでのルート偵察に隊員が入ることになる。

七日、C I へ入るべく今西、加藤、村木、松田、それに久々に床をおきた小原、大塚に辰沼ドクターがこれについて上つた。C I は五二五〇米、BCは四八五〇米で一気にならぬ一四〇〇米の登り、それに荷も十五・二十五キロはある、なかなかの辛い登りである。外国の記録でもキャンプ間四千フィート以上というのは余りない。しかしマナスルは高さの割りにBCからのアプローチが長いため途中でキャンプを作るのは余り得策ではないので最初はキャンプを作らず、

デポとして大体荷上げの見当がついてからC I をさらに二時間ほど上に設けた。これは運行情の単純化で、すべての点について節約となり最初は少々きついがいよいよ方法なのである。午後より雲が多くなり雪がひひとして降る。上つている連中のことを思うとBCは全く天国である。大きな食堂用のテントは重い雪のため潰れそうになつたほどである。

C II への荷上げ

千谷 壮之助

七日（土）快晴後雪 今西、加藤、村木、松田及びシエルパ二名、C I を建設して泊。本月初めてC I が立てられた。小原、大塚、C I 往復。十七時頃より雪がはげしく降つて来る。

（注）キャンプの名称は次の通りとする。BC、C I デポ、（四九〇〇米）、C II（五二〇〇米）C II（ナイケ・コル）C III、C IV（アドヴァンス・ベース）、C V、C VI、C VII。

八日（日）快晴後曇 朝、雪が二寸位積つてゐる。快晴で一寸した景色です。シエルパ、ポーター、日下田、千谷、C I デポへ荷上げ。丁度松田連四名が下りて来る。今日はC I からナイケ・コルを偵察して来る。快晴でC I デポ附近の雪面ではとても暑い。

九日（月）快晴後雪 朝、今までのポーター賃を支払つて、C I 以上のポーターとしてチベツタン八名、ネパリー二名を契約するスッパの夫人、長男、次男は、解

約されたポーターと共にチョココンに帰って行った。スッパとボディガートはBCに残る大塚及びポーター八名、CIデポへ荷上げ。一七〇〇頃よりまた雪となる。夜半止む。夕食後今西より計画発表あり。

隊の編成は次の通りとす。

隊長、辰沼、パサンブタール
依田、サルキ

①隊 小原、千谷、徳永

②隊 今西、加藤、日下田

③隊 村木、大塚、松田

行動予定は次の通りとす。

十二日 ②+③+依田はBC↓C

十三日 ①はBC↓C

②+③+依田はCI↓C

十四日

①はCI↓C II

②はC II ↓ C III 偵察

③はC II 荷物整理

十五日 ②はC II ↓ C III 偵察

③はC II 荷物整理

十六日 ①+②+③+依田はC II

↓ BC

十七日 十九日 全員BCに滞在し

二十日以後の計画を立てる。

シェルパ一六名、ポーター一〇名、十日CIへ上つて泊る。シェ

ルパー一六名、十七日BCへ下りて

休養。ポーター一〇名、十八日C

Iにて休養。

十日 (火) 快晴後雪後晴 シェ

ルパー一八名、ポーター一〇名CI

へ上つて泊る。うちシェルパ二名

BCへ帰る。小原、依田、サマ・

ゴンパへ写真をとりに行く。ヘッ

ド・ラマ不在。今西、徳永、村木

BC裏山へ行く。日下田CIへ荷

上げ、一六時三〇分帰着。十七時

頃より一寸雪が降つて来たが間もなく止む。マナスル氷河、ナイケ山では毎日、昼夜共しばしば雪崩が起つてすごい音を立てゝいる。

十一日 (水) 薄曇 今日珍しく終日薄曇、時々小雪模様。隊員一同BC停泊。シェルパ、ポーターはCIデポよりCIへ荷上げ。

BCの最近の気温、最高二二度、最低零下四・五度。

十二日 (木) 快晴後曇 依田隊

+②+③はBCよりCIへ。植隊

はBCより旧CI (一九五三) へ

上つて泊る。

①隊はBC残留。

シェルパ、ポーターはCIデポより

CI ↓ C II へ荷上げ。

十三日 (金) 快晴後曇後小雪

依田隊+②+③はCIよりC II へ

植隊は旧CIよりCIへ。

①隊はBCよりCIへ。

シェルパはCI ↓ C II 荷上二往復

ポーターはCIデポ ↓ CI 荷上二

往復。

十四日 (土) 快晴後曇後小雪

植隊+①はCIよりC II へ。

今西、加藤、村木、日下田はC III

ルート偵察。

大塚、依田、松田はC II 荷物整理

シェルパ、ポーターは前日に同

じ十

五日 (日) 快晴

午前中大塚、徳永、松田は黒岩へ

繩梯子取付け。

植隊長、今西、辰沼、小原、千谷、

加藤、村木、依田、日下田はナイ

ケ山の五七三〇米の所で登りア

イス・フォールのルート偵察をす

シェルパ、ポーターは前日に同じ十六日 (月) 快晴後曇

①隊はC II よりBCに下る。

その他の隊員はBC停泊。

シェルパはCI ↓ C II 荷上後BC

に下る。ポーターはCIデポ ↓ C

II 荷上後BCに下る。

十七日 (火) 快晴後曇 一同B

C 停泊。

十八日 (水) 快晴後曇 一同B

C 停泊、計画会議。小原より次の

組分け発表あり。二十日以後この

隊別にてC II 以上の荷上げを開始

する予定なり。

L 隊 植隊長、辰沼

P 隊 依田、サルキ

A 隊 今西、加藤、村木、ガルツ

エン、パサンダワ、ウォンディ、

タシ、グンディ、チョウン

B 隊 大塚、松田、ミンパター

ダワテンダツ、イランギヤル

ベンバズン、ハクパツェリン

C 隊 徳永、日下田、アンダワ、

チョタレイ、ニマテンシン、マン

ナンギヤル

D 隊 小原、千谷、アンバブ、ア

ンテンバ、ラクパテンジン、ポー

ター八名

十九日 (木) 快晴後曇後小雨、

一同BC停泊

マナスル隊のシェルパ

No. 145 Gyalzen (Sirdar) (1918)

50 Chomimo. 35 Kabru. 54
Dhaulagiri.

No. 152 Ang Dawa (1925)

1949 Pyramid Peak. 52 Ee-

rest. 50 Annapura. 55 Loh-

se. 50 Garwal. 51 Nanda Devi

51 Rathong. 52 Everest.

No. 18. Ang Namgyal (1934)

1953. Everest 1954 Manaslu.

55 Lohse.

No. 179 Ang Temba IV (1928)

1952 Lhonak. 52 Kamet. 53

Manaslu. 54 Barun (Hillary)

55 Kangch (Evans)

Choetare (1933)

1953 Everest (Hunt) 54. Ma-

kalu (Siri)

No. 198 Chung (1929)

1953 Sikkim. 53. Panch Chuli

53 Lohse

No. 49. Dawa Thondup (1907)

1933 Everest. 34 Nepal. 35

Karakorum. 35 Garwal. 36

Everest. 37 Sikkim. 38 Mas-

herbum. 39 K. 43 Bandar

Punch. 45 Chomimo. 47. Ga-

urisanter. 50. Annapura. 50

Api. 51 Trisul. 52 Everest.

52 Everest. 53 Everest (Hu-

nt) 54 Barun. 54 Cho yu (La-

mbert). 55 Lohse.

No. 167 Gundin (1931)

No. 159 Lia (Lia) Namgyal (1923)

1945 Chomimo. 50 Panch Ch-

uli. 52 Nepal. 52 Garwal. 53

Manaslu. 54 Manaslu (Cook)

54 Makalu 55 " 55 Manaslu

No. 1 Nym Phutar (1907)

1933 Everest. 34 Nepal. 35

Sikkim. 36 Siniolchu. 39 La-

houli. 49 Pyramid Peak.. 52

Chokhamba. 35 Katmandu

No. 177 Nyima Tensing IV (1930)

1952 Kabru " Sugar Loaf. 53

Manaslu. 54 Makalu. 55 "

No. 160 Pasang Dawa (1924)

1946 Sikkim. 50 Nepal. 51

Kulu. 52 Chokhamba. 52 Ga-

rwat. 53 Everest. 53 Annap-

urna. 54 Barun. 55 Makalu

No. 19. Pasang Phutar (1910)

1929. Kangchenjunga. 33 E-

verest. 35 Sikkim. 35 Kabru.

36 Nanda Devi. 38 Masher-

brum.

No. 182 Pemba Sunda (1932)

1952 Everest. 53 Sikkim. 53

Karakoram. 54 Manaslu. 55

Lohse.

Sarki II (1928)

1949 Sikkim 54. Manaslu.

No. 236 Tashi (Choia) (1931)

1953 Dhaulagiri. 53 Nun. 54

55. Manaslu.

Wangdi (1932)

1954. Makalu. 54 Gauri. 55

Makalu.

以上廿名であるが何れも相当な

山脈を有する者であり、ことに今

回のサードのガルツェンは同名

の前二回のサードに比べては統

率力において遙かに勝れず、昨年

秋の先遣隊によつてその優秀さ

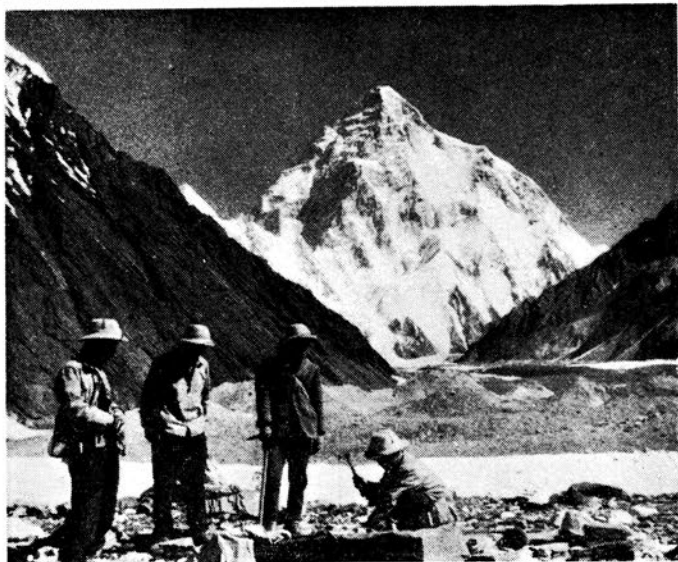
は十分証されてゐた。(成瀬)

戦後最初のアム ネ・マチン探検

吉沢 一郎

翌日南方に出掛け、ツァリン泊とオリン泊の真中にある双峰の雪山に登った。高さは四七〇〇米ばかり、ラツオン族によるとツェバガセ(二湖の間の山神という意)というらしい。

源。従つてこれも黄河の主たる水源の一つである。
ツァリン泊の周囲には断崖をもち、雪に被われた高い山がある。北にあつて南西に延びているのがメンコチャツ山、西にあつて南に延びるのがソロマ山、南にクオイン山があり、そのずつと南にあるのが巴顔喀喇山脈である。こゝは崑崙、アムネ・マチン、バインカラといったユーラシア大陸の三大山系が合一する場所に当る。山男としては一度は行つて見たいところである。ツァリン泊の東側にグンチ族のいうドウロンという



カ・ラ・コ・ル・ム 京大学術探検隊記録映画

☆……昨年五月から八月にかけて行われた京大木原均博士を隊長とするカラコルム・ヒンズークシ学術探検隊の記録映画カラコルムがイーストマンカラー総天然色でこのほど完成した。今西錦司博士を支隊長とするカラコルム隊はカシミール地方のギルギットからカラコルム氷河地帯に入り植物地質、人類の三つの立場から各種の学術調査を行つた。
☆……この映画の主な内容は、カラチの市場、コブラ使い、小麦の先租はたなる小麦、砂漠に咲く植物、美しい回教寺院、優美なアフガンじゅうの女、アフラガニスタンの主食、顔をいせぬ回教徒の女、ロバを襲うハゲ鷹、砂漠のジブシ、珍しい砂漠の鳥、オアシスの市場、現存するジンギスカンの後えい、神秘的氷河地帯をゆく、動く氷河、世界第二の高峰K2の偉容その他で上映時間一時間二十二分、七三六〇呎の長編である。
☆……カメラマンは林田重男、中村誠二の両氏、カメラはターレット・アイモを携行し、中村カメラマンはジブシの旅が始つたパキスタンのクエッタから最終コースであるイランのカスピ海にいたる一万余キロに及ぶ間食事と寝る時のほかは、カメラを片時も手から離さなかつたという。(写真はK2)

小湖がある。

ツァリン周辺のスケッチや測量を済ませて、馬大佐と約束したオリン泊の黄河への出口の北岸に戻る。こゝがC26となる。

以上でクラークとしての目的は大体達せられたので、今度は北方柴達木盆地を経て庫塔泊へ出ることにする。

C26を午前五時に出発、これで黄河の流域とはいよいよお別れである。九時半、荒涼としたアムネ・コル山脈の南麓(四三〇〇米)に達した。西方延長線上にある山は五六〇〇米から六〇〇〇米に及ぶものがある。

ぶものがある。

一時間後に峠(四七五〇米)の頂上に達した。道は左が薄く残されていく。反対側は岩なだれが出て程の急斜面なので間隔をあけて下る。この懸崖のような道は次第に峡谷の中へ入つて行つた。河は北に流れている。やがて開いた場所に出てC27。両側には雪原と氷河をかけた山がズラリと並んでいる。

翌日なおもこの河を下つて行くと再び峡谷となり、左右から氷雪に被われた山が迫っている。春の訪れと共に河は増水して来た。岸沿いの道は非常に危険である。色々の動物が眼を瞪るほど豊富にいる。赤い河の平」というところに来てC28(三六九五米)。

こゝは三つの河が合流して北流する珍らしい地点である。東のはトツシン泊から来るドン河、従つて昔者えられていたようにトツシン泊は黄河の水源ではない。西からはノルジョン泊(阿藍泊)から出るというノルジョン河、今まで歩いて来た河がロンジョド河、この三河が合流して北流するのがユラグ河(シナ名シーシ河)。

しかしこゝC29の附近には、サフラン、花をつけた灌木、絹のような綿の球をつけた柳、緑の松柏科属が見られ、それにタンポポ、金魚草、黄花了つたエニシダなどがお花畑をなしている。
その夜、暴風に見舞われ、テントの中はグシャグシャになつて寝ることも出来なかつた。
翌日は夜明けと共に出発、いよいよヤツガシラ(鳥)からカササギのいる高き山におりて来たらしい。十五哩進んでC30。濃紫の空に上弦の月が昇つて来た。
翌日はなおも峡谷の中を北に向う。増水しているので渡渉には非常な危険が伴つた。四頭のヤクが貴重な荷物と一緒に濁流に吞まれる。荷が重かつたためか、再び浮び上つては来なかつた。
九時頃道は九十度左へ曲つて西に向つていく。千頭にも及ぶクランがキヤラパンに平行して走り去る。見事な眺めであつた。柴達木盆地の南を限る、雪に被われたブルハンブダ山脈の末端が見えて来た。近くの尾根や峡谷には遅くタマリスクが一杯に生えている。蒙古人のユルトもそこそこにかたまつて立つている。三時四十分、香白徳に着いて回教司令官マ・デビオ大佐に迎えられた。馬歩芳将軍からは既に知らせがあつたという。こゝは今までの土地に比べると非常に暑い。蚊もひどいし、蛇にも注意しなければならなかつた。
馬将軍から、一刻も早く、西寧に戻れという無電連絡があつた。

(つづく)

春の北穂滝谷

墨岩尾根からの登攀

早大山岳部

わが部における過去二十年にわたる極地法登山は昭和二十八年第四次前穂高北尾根より北穂高岳登頂をもつて一応の段階に達し、なおその上に立つて個々の技量を、より以上に練磨し、次の段階に進む必要を認め、二十九年度は

剣岳を早月、小窓の二隊に分れて登頂。続いて後立山に転じ、鹿島槍天狗尾根、五竜岳縦走の二隊の計画を遂行した。がしかし、われ

われの考えた所期の目的を達することには物足りなかつた。再度同趣旨をもつて昭和三十年度春山合宿に流谷登攀を取り上げること

意見の一致を見た。ルートは墨岩尾根より前進キャンプを展開し、中堅、上級部員により流谷第二、第三、第四、第五尾根及びドーム

中央稜の登攀を行うことにした。十一月月上旬及び中旬に器具の大半を上高地へ荷上げし、墨岩尾根は

一月三名によつて偵察を行った。日程は二月二十日本隊出発より三十五日間とし、隊員は吉川以下二十一名。

編成

(第一隊) 竹田寛次、菅 琢

(第二隊) 宇田川允敏、田中将利

川口和雄、菊島芳彦

(第三隊) 吉川尚郎、松浦輝夫、

田村修一、井ノ口昌彦

藤島康明、松尾良久

(第四隊) 内田泰男、中島亨、小

原達、石田順康、日能

義彦、川村宏之、平松文男、小山雄敏、高野洋志雄

行動概要(昭和卅一年二―三月)
十六日先発隊六名出発。

十七日(曇後雪)先発隊、バスが雪崩のため横止。沢渡泊。

十八日(晴)先発隊ホテル入り。

十九日(快晴)零下二十五度、先発隊餅つき。

二十日(小雪)零下九度、先発隊餅つき。本隊吉川以下十二名出発。

二十一日(雪)零下十度、先発隊餅つき。本隊前川渡より中ノ湯へ入る。

二十二日(曇後晴)零下十二度、本隊ホテル入り。後発隊三名出発。

二十三日(晴)零下十八度、全員十八名岳川谷BC予定地へボツカ。岳川取付きにスキーデポ。西

穂高沢正面約一九〇〇米にBCを建設。十人用夏天幕三張、アークチック一張り張る。

二十四日(風雪)零下九度、吉川以下五名BHより先行して墨岩尾根ルート工作に向い、下部取付

を偵察三〇米一本を取付の雪壁に固定して引返す。ボツカ隊十二名

BH→BC間ボツカ一往復半して全員BCに集結する。後発隊三名

中ノ湯よりBC入り。

C 荷上げを完了する。

二十六日(快晴)零下十六度。全員CI建設に向う。竹田以下三名先行し、フィックスの補強を行う。CIは稜線直下の岩壁の下に

雪壁を切り落して建設。三人用、五人用各一張り張り一隊及び二

隊の宇田川、菊島の四名が入る。CI上部の岩壁は九〇米フィックスを四五米に減じ繩梯子五米をさ

らに増設する。

二十七日(風雪)零下十三度、CIの四名はCIIへのルート工作

ジャンダルムに三〇米二本、ロバの耳に四〇米一本、三〇米三本

をフィックス。さらに穂高小屋上に五〇米をフィックスする。BC

の二・三・四隊はCIへボツカ。

二十八日(風雪)零下八度、CI停滯。BCは、熱湯をあびて足に

火傷した石田をホテルへ降す。

二十九日(風雪)零下十一度、BC、CI共に停滯。

三十日(風雪)零下十二度、BC、CI共に停滯。

二日(風雪)零下十九度、CIの四名、CIIへのボツカに出て、

コブ頭にデポし、ロバの耳のルート補強を行つて引返す。BCの

入る。BCの四隊CIへ入る。

五日(快晴)零下十三度、CIIの八名CIより逆ボツカ。CIの三・四隊はCIIへボツカ。三隊CII入り。大半の物資のCII集結を

終る。

六日(風雪)零下十一度、CII・CI共に停滯。

七日(風雪)零下十二度、CII・CI共に停滯。

八日(風雪)零下二十一度、CII・CI共に停滯。

九日(快晴強風)零下二十二度、CIIの二隊三名ルート工作に先

行、濁沢岳の下降に四五米。濁沢槍の下降に九〇米をフィックスし

てCIIにもどる。CIIIボツカ隊は強風のためCIIへ引き返し様子を

見る。吉川、松浦、菅の三名はD沢を下降、スノコルの偵察。C

IIの四隊はCIを撤去しCIIへ入る。午後、上級生のみでCIIIを建

設。第二、第三、第四尾根アタックの六名入り、こゝにアタック態

勢を完了する。

十日(晴)零下二十三度、第三尾根、第四尾根アタック。第三尾

根隊(竹田、川口)はD沢を下降。スノコルを乗越してC沢右股に

まで四〇分を要する。すでに二時をすぎたため、再挙を期し、こゝより引返す。

CIIの九名北穂登頂。宇田川、川口CIIへ帰り、松浦、小原の二名CIIIへ入る。

十一日(晴後風雪)零下十九度、第四、第五尾根及びドーム中央稜のアタック。

第四尾根隊(吉川、松浦)は前日のルートに登り、Cカンテを強引に吊上げて越す。この頃より悪

化した風雪の中をガリを登り、ピナクルに達し、ツルム頂上直下

二米のオーバーハングを二時間を要して乗り切る。コル3からはD

沢側にルートを取り午後五時三十分、スノコルより十二時間を要し稜線に達した。

第五尾根隊(菅、菊島)は末端を第四尾根側より取付きリッジに

出、三ピッチの後コンテナスで大ギヤップに出た。Bピークからは脆いナイフリッジを慎重に約

三時間の短時間で稜線にとび出した。

中央稜(内田、小原)は第三尾根隊のルートを取りT2よりTA

ヘトラパスしC沢左股側のチムニーに取つく。チムニー内は雪が

つまり苦斗する。TBからはチムニーに入り、この上の非常に悪い

凹角を乗り越して右寄りにドーム頂上に達した。

CIIより五名CIIIへ連絡。十二日(風雪)零下十六度、CIII・CII共に停滯。

十三日(晴強風)零下廿二度、CIIIの内田、小原第二尾根主稜を

登攀。第二尾根隊帰幕を待つてCIIIを撤収。宇田川、中島、菅、高

野、平松、小山の六名CⅠへ下る。これで予定せる登攀を終了。撤収態勢に入る。

十四日(晴)零下十六度、CⅡ・CⅠ及びフィックスを撤収。全員B Cに下る。

十五日(快晴)零下十二度、B Cを二往復で撤収。ホテルへ下る。

検討 当部においては昭和二十五年春に天狗のホルより滝谷登攀の計画を遂行しているが、われわれは新しい部員の構成により、あくまでも実力向上を目指して再び同様の計画を行ったのである。合宿は所期の目的を充分果して予定通り無事終了した。しかし細部にわたって検討する時、問題となるべき点が多々ある。ことに計画の面から見ると実動を十七日間とし全計画を三十五日間としたが、例年より悪天候であつたにもかゝらず二十五日間で終了したのは、以前に比べて技術の向上、装備の充実などにより行動範囲が拡張されたと考えられる。行動日数と、計画日数の割合については再考の余地がある。所期の目的を達成したとはいえ、検討に検討を加え、さらに究極の目的に進むべく一層の努力をするつもりである。

(田中将利)

登山全書発行さる

本会監修、川崎隆章氏編の登山全書第一巻夏山篇が予定通り発行された。主な内容は登山入門、登山計画、パーティの編成、夏山の技術、装備と用具、露営、食料、山案内人、女性と登山、高山植物、夏山案内その他で定価百八十円、以下六巻まで続いで発行される。第二巻は岩登り、沢歩き篇で六月上旬発売の予定である。

二つの遭難報告

①前穂北尾根

立大山岳部

戦後当部は比較的順調な道を歩み、先輩の残した貴い体験を基に、より困難な、大きな山への対決を当然とし、今春は前穂高北尾根へと向つた。私達としては精進に精進を重ね、或る程度の自信をもつて入つたが、力及ばず、最愛の部員の死という悼ましい、決定的な敗北に終つてしまつた。

事故を起してしまつたからにはその解決を計ることが目下の急務とし、遺体捜索に主力を注いでいるが未だ遺体の発見に至つてない。私達は全員が反省し、自己を再認識し、この苦しみが生んだところのものを肝に銘じて今後の登山に生かすべく努力している。

計画 横尾小舎をB Hとし、裏屏風の無名尾根に取りつき、CⅠ屏風の頭、CⅡ七峰、CⅢ三・四のホル、CⅣ前穂とキャンブを進め、北穂、ジャン・明神の登頂を狙ひ、参加者はCⅠ山野井他十名、期間約四十日を要するものとして、必要な器具、食糧は殆ど横尾に集結済みであつた。偵察は秋冬各二パーティによつて行われ、一トに対する不安はなかつた。

行動概要 昭和三十一年二月二十七日 先発隊田中三郎・他四名夜十時の準備にて新宿を発つ。二十八日(晴)鳥々よりバス、沢渡泊り。二十九日(晴)荷を二度に運んで坂巻泊り。

三月一日(風雪)深雪と雪崩の危険多く取入口まで行くも引返す。二日(晴)取入口の荷を加え上高地へ入る。

三日(曇後晴)先発隊横尾へ入る。本隊最終夜行で出発、山野井他五名。

四日(小雪)先発、小舎にて食糧、器具の分類及び梱包。本隊、前川渡までバスが入り、中の湯泊る。

五日(晴)先発、屏風のザイル工作、約六時間を費し三十米三本のザイルを固定し、ボツカ・ルートは完成した。本隊、上高地へ入る。

六日(曇)先発、梱包。本隊横尾入りして両隊合流。

七日(曇)屏風の頭荷上の予定で出発せるも、フィックスを越してガスのためルートが不明となり六十貫の荷をデポ。

八日(曇後雪)屏風の頭、耳のホルにて天候悪化のため荷をデポして下る。本日より新メンバーを編成する。(A)ザイル工作山野井・平井、(B)馬淵・浅古・富代、(C)太田・高橋・八木、(D)田中・堀・小林。

九日(晴)A B班CⅠ入り、CⅡ荷CⅠ荷上、CⅠは六人用、三人用各一張の天幕を設け、デポの荷も大半集結出来た。山野井は日没前に八峰直下まで偵察をする。

十日(晴)零下二十度、二十五度、A B班約十八貫の荷を持ちてIIまでのザイル工作に向ふ。七時に出発し八時前日の引返し点についた。既に雪庇はなく、やや急な登りとなつて八峰手前のピークはすぐ上だ。殆んどリッジ通しに登

り引返し点から十五歩位の所で雪が段状になつたところへ出た(シユカブラの変形)直登しにくく、太い樺の生えた緩斜面を奥又側をややからみ気味に、山野井、平井、富代、浅古、馬淵の順に登つた。

高差三米位で平な所へ出る所で突然、異様な音と共に一米位上から硬雪が割れ、板状雪崩を起して全員巻き込まれ、山野井、富代は四十米程で立木に当つて停止し、馬淵、平井は約六百米流され自力ではい出た。応答によつて浅古昌宏の行方不明を知り直ちに捜索をする。中途より馬淵はCⅡに荷上げ中のC D班に連絡するためCⅠに向ふ。残つた三名は捜索を続行するも容態が次第に悪化し、効果も上らず遂に尾根の蔭に避難し応援の来るのを待った。

C D班はCⅠ荷上げに向ひ、屏風の頭下で馬淵のコールを聞き、CⅠにて状況を知つて田中、太田が応援に向ふ。堀以下はCⅠにて待機し馬淵の手当をする。現場に向つた二名は捜索ののち負傷者を連れ慶応尾根を越え奥へ出て徳沢園へ入る。太田はさらに横尾往復の後、連絡のため上高地へ下り状況連絡所へ知らせる。

十一日(小雪)田中徳沢よりCⅠ途中まで上り馬淵を下ろす隊を指揮横尾へ入る。堀以下は馬淵を下ろし、八木・小林を横尾へ残して上高地へ。山野井徳沢より横尾に向ひ馬淵を待ち共に上高地へ。太田入夫を伴ひ平井・富代を上高地へ下ろす。O B 杉山・関、救援のため入山。

十二日(雪)田中隊は横尾にて器具・食糧の整理、堀・高橋・O B 関横尾へ入る。負傷者四名は太田・O B 杉山につきそわれて沢渡へ下る。山本監督他九名救援のため入山。

十三日(晴)O B 関・田中他四名CⅠへ入る。午後O B 羽鳥他五名CⅠへ入る。CⅠへ入つた隊のうち田中・O B 関、他二名は日没より現場に向ひ偵察を行い奥又を経て徳沢へ入る。O B 山本他三名徳沢へ。

十四日(晴)山本他五名、慶応尾根を越えて現場に向ひ捜索。CⅠの羽鳥以下は現場へ下り捜索をし山本隊は徳沢、羽鳥隊はCⅠへ。浅倉・八木はCⅠへ連絡に向ひ徳沢へ帰る。O B 佐藤・相沢他三名上高地より徳沢へ入る。

十五日(晴)O B 佐藤他六名奥又より現場に向ひ捜索、荷の都合上慶応尾根に天幕を一設け、後CⅠの羽鳥隊は現場の捜索、後両隊共に徳沢へ下る。夜、全員徳沢に集合し今後の見通しについで検討した結果、二重遭難のおそれもあるため捜索を中止することに決定。

十六日(曇)O B 羽鳥他五名下山。田中他六名CⅠ撤収、他は慶応尾根の天幕を撤収。合宿参加者は残して全員下山。合宿参加者はCⅠの残り荷と、横尾の荷を上高地まで移動するため残る。残留者六名。二日間の滞在があつただけで二十三日合宿参加者も一応の始末をして松本へ下る。

(山野井武夫)

なお浅古君の遺体は五月二十二日現場をパトロール中の山野井、鯉坂両部員により発見収容された

② 北穂高滝谷

東大山岳部

今年度の春山合宿はその計画が昨年の春より考えられ、九月のリーダー会で決定し、その線に沿って秋山、冬山の合宿を行い、また数回の部員総会、リーダー会の検討を経て、次の如く決った。

参加人員を四パーティに分け、槍ヶ岳に集中登山を行う。日取りは昭和三十一年三月十六日より四月四日まで十九日間。

(A) 西穂パーティ 末永他二名
(小川透を含む) 十八日発松本より上高地に入り、西穂天狗のゴル、奥穂、北穂を経て、南岳より槍ヶ岳に至る。

(B) 立山パーティ 磯他四名、
十六日発富山より弥陀ヶ原を通り、一ノ越・五色・スゴ・薬師・黒部五郎・双六を経て西鎌尾根より槍ヶ岳に至る。

(C) 北鎌パーティ C.L.土肥他二名、十八日発大町より高瀬川に入り、湯俣千天出合、北鎌沢を経て、北鎌尾根より槍ヶ岳に至る。

(D) 槍沢パーティ 朝倉他八名 十八日発松本より上高地に入り槍沢を登って槍ヶ岳に至り、A B Cパーティの槍ヶ岳到着後のサポートを行う。

四パーティ集結後は槍沢より下山する。
以上の計画によつて合宿は行われ、二十七日にC・D両パーティがまず肩に到着、Bパーティも三十日に予定通り到着したが、二十八日Aパーティが北穂で遭難し

た。従つて遭難報告が槍の肩に入った時に、C・Dパーティ十一名のうちAパーティをサポートするため六名が南岳にテントを出してあり、肩には五名が残つていた。またBパーティは未到着で、双六におり翌三十日に到着した。

遭難状況 三月二十八日は無風快晴であつた。午前八時穂高小屋発、濁沢岳頂上よりアンザイレンして濁沢のゴルまでワン・アップ・ア・タイムを続けた。このため予想外に時間がかかり、コル着十二時。一時発。ドームまで殆んど稜線通りに行き、ザイルを三ビッチ使つた。ドームから少し濁沢側を

捲いたが南峰の濁沢側トラバースは、雪が腐つていたのと、日射が強いので危険性が大きいと判断し、南峰頂上にルートを取つた。こより北峰、南峰のゴルに下るガリに、アプザイレンのピンになる岩があり、ここを下路にした。距離十五米、約六十五度の傾斜で雪は相当しまつていた。

まずトップが空身で懸垂で下り、上の二人が荷物を下ろした。ところが下の足場が狭いため荷物を背負つてコルまでトラバースし(ほぼ水平二十歩位)、そこでミドルの小川は荷物を背負つたままザイルにつかまつて下降し、ラストも同様これに続いた。ラストが下の足場に下り立つた時、小川は「ちよつと待つてろ、俺がザイルを外してやるから」といつて、コルに荷物を置いて空身で戻つて来た。

あと四、五歩でザイルの下の足場に着くという時、ちよつとバランスが崩れてよろめいた。その瞬間

間拍子をつけて早く渡つてしまおうとするような態勢になつたが、アイゼンが雪面に正しく置かれなかつたため、足許から滑り出した。その時から相当のスビードであつたが、約二米滑つた時滑落停止の姿勢になつた。しかし、腕が伸び切つたのと、ピッケルのバンドがゆるかつたのとで、一米も雪面を搔かないうちに手からピッケルが離れ、そのまゝぐんぐんスビードを増し、約三十米先の雪面から仰向けの姿勢で姿を消した。

雪面の氷化はかなり進んでおり、アイゼンのツアックがやつと半分喰ひ込む程度で、傾斜は約三十五度位と思われた。場所は第一尾根と第二尾根の間の沢(B沢右股)である。残された二人はしばらくは茫然としていたが、すぐヤツホーをかけ、目のとどく限りの下部を見渡したが、静まり返つた滝谷からは何の応答もなく、直ぐガスが強い風で吹き上げて来た。

この時、時計を見たら三時少し前であつた。二人協議の末、直ちに下降して探すのは非常に危険であること、及び小川が殆んど絶望であることの二点から断念し、早急に槍の肩と連絡をとることにし、不要の荷物を南峰直下にデポし、三時四十五分北穂沢を下つた。

会 員 計 報

藤崎定雄氏(会員番号一六七六番)別府鉄輪温泉で神経痛のため保養中のところ五月十一日心臓麻痺のため死去、御遺族は八幡市元城町藤崎剛氏。氏は加藤敦功、橋本三八、月原俊二の諸氏と共に九州岳界に尽力された。

★ 図書紹介 ★

ある婦人と山

(Une Femme et la Montagne.)

シャベル夫人著

昨秋来朝して日本の山谷に親しみ、本会員にはおなじみのフランス女流登山家から本会に自著を贈られた。

北仏フランドルに住み、四人の男女の母である夫人が、戦争中の一九四二年秋ふとした機縁からド・ワイネの山中に行き、そこでスキーの味を覚えたのが病みつきになり、その時知り合つたフレンド氏(昨年女史と同行来朝したシャモニー国立スキー学校長)に手引きされて、ド・ワイネからシャモニーへと毎年夏山冬山に打ちこみ、一九五二年にヒマラヤ登山に出かける前までの山とスキーのくろしく楽しい思い出と感想を軽るい筆でしるしてある。

戦争の終りに近く、はげしい空襲をきけてメイジュ山麓ラ・グラヴの山荘に疎開して食糧あきりに苦心したり、独逸軍が攻め入つた折りレジスタンス側の偵察に危うい役を買つたり、その間にメイジュ(三九八二米)のほりに、またイタリア境のモンヴィゾ(三八一九米)にフレンドと出かけイタリア兵のすきを見て迫撃砲を分捕つたりする。

ある時には地中海岸カラシクの絶崖に岩のぼりを楽しみ、シャモニーではスキーの猛者に伍しては

げしくわざを練り、ときどき無理をして膝を挫いたり脊骨を傷つけたりする。夏はむずかしいエグイユの岩のぼりに精進して、氷河で二つたり、危く雪崩にやられかけたり、雷雨に打たれてビヴァークしたり、ひどい眼にあうが、陽気な気分は紙面にあふれている。子供供つてフレンドたち常連と組んで岩のぼりとスキーに過す山の生活はいかに楽しそうであり、冷雨にさらされた高いところの岩棚で野宿するとき、いつもは甘えたことのない息子が「お母さん大丈夫だよ」といつて身をすりよせ身体を温みで暖めてくれるのにホロリとしてこんな機会を与えてくれた岩峰に感謝するところなど、気のいいオバサンの面目がうかがわれる。

献詞には「わたしの子供や孫たちに、私がおいぼれてばかりいたのではないことを思い出したために」とあつて、女流登山家の気骨をしめすところが多いが、また難所にかかつてペソをかいたことを白状したり、登山がつかなく岩のぼりがおそろしいと正直に打ちあけているのは気持ちがいい。

シャモニーの危峰に挑んで、長い時間の苦闘の末まづくらやみを降りながら「この日私はアルピニズムは女のするスポーツではないことが本当にわかつた。……たしかに例外があることは認めるが、それは原則を裏書するものだ。……私は、カラシクやドロミテなどの純粋な岩のぼりは、女でも多少の筋力と勇気があれば、身軽にうまくこなせるから、女に向いていることを認める。しかし、身体が

動かなくなつて歩いて歩いて歩きぬくような長い山のぼり、寒さや風や吹雪をおかし、凍りつくような晩にさく焼くような昼の太陽にさらされることは、女の天性にもかよい皮膚にも向かないと思う」と書いてある。またスキーで脊骨をいため暫らく病臥したのち、シャモニーに戻つて岩のぼりの難所にかかつたとたん、不意に「おそろしさ」を覚えて脚がすくみ、フレンドから「誰でもこわいのだ、努力してそれに打ち勝つ意志をはたかせればいいのだ」といわれても「このたぐいのおそろしさは一種打ち勝ちがたいパニックであつて、ラ・グラヴで独乙兵にうたれる危険を冒したときのように理屈で押えることは出来ない」となげく。たぬしは山をぼりをやめようかと思ひなやんで、とうとう岳友に「私はこわがついてる」とハッキリ書き送つたとたんに気持がスッキリした。次の夏エグイユの岩壁では少しも恐怖を感じなかつたという。

有名なガイドのフリゾン・ロツシュがこの本に序文を書いて「婦人は満身のねばりと熱をもつて山のぼる。一般に婦人は山では全くめざましい。ガイドとして私には、不器用でよく病な若者よりもかよい娘さんの方が、ザイルの相手に望ましい。婦人は気よく、決して永くはつづかない。岩場ではすばらしく、ガイドに信頼していれば、どれいはいはなれわざでもあたりまえ

のようにこなす。われわれは婦人に自分の意心をうまく伝えて、婦人だけでは到底出来ないようなわざでも努力でもやり遂げさせることが出来る」といつてゐるのはお世辞ではないようだ。

最後の章では、山の魅力と登山の醍醐味を論じて、この無上の楽しみは登山家各自の力に依つて味わえると説き、山の讃歌をもつて結んでゐる。

われわれが東京で会つたときに受けた、気のいい陽気な山ずきのオバサンという感じそのままの人があらわれていて、気軽によめるいい山の本である。(S.H.)

一五×二一冊、本文二一〇頁
写真一八枚、Paris: Flammarion. 1954. 600 fr.

遠い山遙かな旅

三田 幸 著

「山なみはるかに」に次ぐ著者二冊目の山の紀行随筆集である。この大半をしめるのは山岳の四十九年に発表されたマナスル遠征記(一九五三年)で、山岳にのせられたものにクリシナ、ディリー兄弟、マナスルの姿と登路発見、マナスルは登れるだろうか? の三編を加えて一本にまとめたのである。一九五三年のマナスル登山隊の報告は毎日新聞から出版された「マナスル」という立派なものがあるが、山岳に発表されたものの附記として三田さんも書かれてゐるように、各隊員の分担執筆で早急にまとめ上げられたものだけに焦点がぼやけ、感銘が薄いものとなつてゐた。それを補うものとして日本から出た最初の八千メートルの山への

挑戦の報告が、ここに隊長の眼を通じて一本にまとめられたのは大へんによろこばしいことである。

以下「何故山へ登るのか」から「遭難—父の心配」までの十七篇の随筆は何れもそのどこかにヒマラヤの話が顔を出しているといふのも、ちよつとほかの人には真似の出来ないことである。もちろんカルカッタやマナスルの登山のエピソードにしろ、それがとつてつけたようなものではないといふところに頗る面白味があり、いつてみればヒマラヤの登山といふのがもうすつかり三田さんの心の中にとけこんでしまつてゐる。全く三田さんほど恵まれた登山者も少いのではないかと、一種の羨望の念も禁じ得なかつたといふのがこの本を読み終つた私の読後感である。

(山崎)

昭和三十一年三月新潮社発行、本文二二六頁、写真十六頁、定価二二〇円

八千メートルの上と下

ヘルマン・ブール著

横川 文雄 訳

世界第九位の高峰ナンガパールの頂に単身立つたヘルマン・ブールの半生記である。一九五三年七月三日高度六千九百メートルの地点に設けられた第五キャンプから直線距離にして六キロ、高度差千二百余米もある最後の登路をたどり一気には突破し、しかも帰途日没のため八千メートルの地点においてピバークを余儀なくされながらも、体力減退の極限においてよく生還し得たそのアルバイトが、どのような

に激しいものであつたかはこの本のつてゐる彼の平常のプロファイルと、四十一時間後キャンプにたどりついた時の写真とくらべてみればそれがすべてを物語つてゐる。この二十九才のチロル人の頬はこけ、眼は落ちこぼみ、まるで七十をすぎた老人のようなしわだらけな顔にやつたところである。

ブールはいつてゐる。「八千メートルのような巨峰は、最後に個人的な危険を冒すことなしに登頂出来るものではない。一九五三年の遠征隊の指揮者たちはこの危険を冒そうとしなかつた。余りにも慎重な理性的行動と誤つた天候判断に始終した彼らの立場からみればこれは彼らに許された権利だつた。だが登頂隊はこの危険を冒した。

(中略) 僕は決して気違いじみた行動をとつたわけではない。僕らの意志は理性によつてささえられていた……」

一九五三年ドイツ、オーストリア合同ナンガパルト遠征隊が隊長と隊員との間に大きなみぞを残したことは当時早くから伝えられていたが、ブールのこの言葉によつてその原因の一端を窺ひ知ることが出来るように思う。しかし幸いブールはその鉄のような体力と意志をもつて頂上に立ち、無事に帰還したから問題はなかつたものの、若しここで荒天にあひ、アクデントをもつて終つたとしたらどうであらうか、しかもその可能性は決して少くはなかつたようである。万一その場合には過去におけるドイツのナンガパルト遠征隊がそうであつた如く、多くのばげしい非難の対象となつたであらうことは想像に難くない。これがこの書を読んだ卒直な感想である。龐大なこの書物をよく日本語にこなしている訳者の努力は大いに多し。

昭和三十年十月朋文堂発行、四九二頁、写真十八枚、定価五百円

山の気象はどう変わるか

大井 正 一 著

新しい理科教室の第三十三集として発行されたもの。山に関する気象の本が一本にまとめられた単行本として出版されたといふことは大いによろこぶべきことであらう。

第一章山の気象にはじまり、第二章山の気象観測、第三章冬山の気象、第四章春山の気象、第五章夏山の気象、第六章秋山の気象、最後に参考文献まであげてある。まずこの書をよく読みこなしておけば山の気象に関するかぎり失敗を演ずるようなことはあるまい。内容もつとめて素人にわかりやすく平易に述べられ、写真をもつてその実例を示すなど細かく気をくばられてゐる。

昭和三十一年三月恒星社厚生閣発行、一一四頁、一五〇円

女性と経験(創刊号)

巻頭の水蜀の話(柳田国男)はいかに柳田国男らしい味のある読みもの。会員村井米子氏の山の女人禁制は大峯山はじめ各山の女人禁制をとりあげたものだが、余り例をみない珍らしい文献である。女性民俗研究会発行、非売品



会員通信

伊予 帆差岳東俣川

藤島 玄

飯豊連峰の越後側の沢は殆んど極め尽された感があり、最後の大地として注目された実川本流より虹吹沢に入りピンカガグチ沢を詰めて飯豊本山に突上げるコースも会員井本巖、田辺修君らによつて昭和三十年八月五日より九日の間に踏破されて、残るのはいぶき差岳の東俣川だけになったのである。大石川は大きく西俣、東俣と二分し、東俣は西俣に比較して雪蝕地形が險しく、新潟側というより寧ろ山形側の地形に似ている上にフツコシ瀑以上は岩魚が廻らぬので岩魚釣や紫蔵探りも入らぬため、地元民にも夏の沢は全然知られておらず、岳人の廻りもフツコシ瀑前後で逃げた記録を二三散見するに過ぎないのである。

昭和三十年六月三日から六日まで、会員佐藤一栄、井本巖、小生と地元高橋千代吉と四人で、第一日金俣泊り、第二日地図の破線路の終りブナイデの越場を渡渉し、

枯松山より派出する吉三の峰の紫蔵の踏跡を辿り大石川の大字の稍上流の広川原へ下つてフツコシ瀑へ出る。フツコシ瀑は兩岸花崗岩の一枚岩に幅一米半位に圧縮された溪水が落差三米位に落ち、側壁に激突して噴水状に凄勢で吹き上げているので岩魚は遡上されないものであった。川の字に入る大沢落合の斜面に露営。第三日は大沢を突上げていぶき差本峰の北、前いぶき差との鞍部に出た。大沢の左右岸は長城のような一枚岩の花崗岩が続く五段、七残の瀑の支流が連続し、沢底は雪溪の断続と大瀑で、雪を攀じ、側を掴み、主稜へ出ればひどい藪が長く続いた。本峰から大熊尾根の夏路を下り大熊小屋へ夕方着いた。が、大石部落までの強行は夜の十一時半まで続いた。

七月下旬、源流地帯と退路偵察にいぶき差岳から地神山、小玉川温泉と歩いて準備完了する。八月十七日、大石に泊る。月山の帰途で連絡不十分のため同行者は千代吉と二人になる。

ブナイデ越場で三吉ノ峰へ取付き、直ぐに東俣川へ下りて左岸の踏跡を伝い、広川原からフツコシ瀑に出て大沢出合は二時半。大雪溪が消えると大沢は驚くほど水は細い。落合より上流は全然未知の溪流、数歩にしても淵と瀑の連続で心も暗くなるほど凄いのので驚く。県境九四一米峰真西下辺りで、早目であつたが川原で露営。

第三日、出発準備中に猿が出てきた。一群二十匹位で思つたより大きい奴ばかりで、右岸へ転石伝いに渡り樹の間からこちらを注視

しているのが小面憎い。山形県の川入より越境してくる紫蔵小屋を二つ発見した。広い川原はいい採草地となつてくれたが、それまでの川は飽くまで清い溪水を湛えた淵と瀑の連続で掘りも多し裸の脚は無数の擦過傷で傷む。それより初めて平易な沢が暫く続いたが、雪をさぶく垂らす雪橋が重なり現れて再び沢は険悪となり、淵と瀑が続けざまに出る。草付きと斜面の横がらみの嫌な処を幾度もやり、霧をかぶつた国境主稜を遙かに遠く漸く見る頃、今日は沢から抜けられないと千代吉が心配し始める。大沢から以来沢は花崗岩となり瀑の直登は比較的容易であるが、淵が大きく深く近寄られぬのが難であつて、直登と掘り同数の二十度近くをやつたであらう。いよいよ沢も詰り扇状状になる千米前後へきて、植物もすつかり一変しニツコウキスゲ、ナンキンコザクラ、キンコウカの満開となると、後はコースの選定だけになった。滝も淵も大きいながら大まかとなり、漸次細くなり草原に続いて終り、鈴立峰南鞍部へ出たのが午後三時。千代吉の希望を入れ、霧の主稜を地神山へ伝い小玉川温泉に投宿したが八時。大夕立となつてしまった。

(三〇・八・三〇)

石川支部報告

池田 知幸

石川支部は数年来沈滞の苦境にあり現在高校生および大学生を指導育成中で、県内金沢市、および

小松市のオーソドックスな山岳団体に連絡しており、支部在籍者は高校生を除き三十三名です。

三十九年度事業報告

- ① 三月中旬～四月上旬、北部白山山脈縦走、行程七十軒、雪穴、十三日間で踏破(戦後二度目) 四名
 - ② 六月十九日アンナブルナ登山講演映画の夕(アメリカ文化センター) 講師立平宜雄、深田久弥
 - ③ 七月二日登山講座、講演、映画会、用具展示会(スポーツ・センター)およびアメリカ文化センター(約三百名)▽近代登山と無線通信
 - 河本俊彦▽高山の医学池田知幸▽天気図について伊藤雄雄▽白山の地質金大講師▽登山計画、食糧、装備小林雄次郎▽白山について磯野三郎
 - ④ 七月二十二日～二十四日石川県体育大会登山部門(白山) 参加者三十名
 - ⑤ 七月下旬～八月上旬剣沢合宿
 - ⑥ 十月下旬～十一月月上旬国民体育大会丹沢登山(龜田与三ほか)
 - ⑦ 十一月下旬～十二月月上旬支部管理の月借小屋整備
 - ⑧ 三十一年二月十一、二日雪中露営講習会(参加者約三十名)
 - ⑨ 三月下旬剣沢、立山、白山登山
- なお本年度計画は特に白山に一年間集中研究することを盛つております。

会務報告

五月 役員総会 九日(水)

場所 本会図書室
出席者 別宮会長、日高副会長
理事 折井、金坂、太田、石坂

羽鳥、徳久、松丸、山崎
評議員 沼井、岩永、神谷、藤木、村井、監事 石原

議事

一、新役員事務分担の件

新役員事務分担をつぎの通り決定
▼総務、渉外小原、折井▼財務経理太田、羽鳥(委員沼倉)▼指導辰沼、山田、大塚、石坂▼編集山崎(山岳、会報) 松丸(山日記)(委員望月、田辺)▼集會村山、徳久▼研究村木、金坂▼支部折井▼国体千谷、金坂▼図書徳久(委員初見)

二、評議員推薦の件

新評議員として成瀬岩雄、渡辺公平、入沢文明の三氏をおし成瀬、渡辺両氏は常任評議員とする。新評議員の任期は三十一年度一杯とする。

三、支部規定(案)について

別項の支部規定(案)を逐条審議し若干の修正を行い、さらに各支部にはかり、六月の役員総会にかけ正式に決定する。

報告

一、信濃支部技術講習会報告

五月三、四、五、六の四日間穂高岳川で行った。参加者は主として高校生で四十八名、非常に成果があつた。(折井)

二、ウェストン祭の件、一八五号発表のとおり充実したものとする予定。(折井)

三、木暮理太郎氏十三回忌は五月七日であつたがゴールデン・ウィークとぶつかったため六月二・三日日本山岳会主催として役員も出席して追悼会をやりたい。山梨支部とも連絡をとる。(神谷)

四、準会員の件、学生などで会

費をはらえない者に会報など実費程度でわけ、会員に準じたとりあつかいをしたい。各支部ともよく打合せて研究したい。(日高)

五、入会の件、紹介者もなく入会してくる者があるが、今後は山岳会の趣旨をよく徹底させ入会してもらおう。

六、月例会計報告 (太田)

支部規定草案決る

支部の設立、運営等についての規定は、古くは会報一〇八号(昭一六、六)、一三七号(昭二一、一)等があるが、定款の改正にもなつて改める必要を生じ、沼井評議員の原案を中心として常務理事会、役員総会において審議してきたが、こゝに理事会案を発表し諸賢のご批判を仰ぐことにした。細大にかゝらずご意見を寄せられたく、それによつて速かに決定案を作成する予定である。

支部規定(案)

昭和三十一年五月

社団法人 日本山岳会

第一章 総則

第一条 定款第五条に定める支部の設立並びに運営は本規定による

第二条 支部の名称は当該支部の所在する地域を明示して「日本山岳会〇〇支部」とする。

第二章 設立

第三条 支部を設立するためには次の各号に適合しなければならない。

一、支部設立地域内の会員もしくは入会手続中の者が二十名以上支部会員たることを同意すること

二、支部設立地域内の会員にし

て前号に反対する者が同意者の三分の一を超えないこと。

三、同一地域内にすでに支部が存在しないか、または当該地域が他の支部地域と重複しないこと。

第四条 支部を設立せんとするときは発起人代表者は予め理事会の了解を得た後次の必要書類を会長に提出する。

支部設立趣意書

発起人名簿

第三条第一号による同意書

支部規約

支部役員名簿

設立以後一年以上の事業計画書

同予算書

第五条 前条の書類は役員総会の審議に附し、会務遂行上支障がないと認めた場合に支部の設立を承認する。

第六条 支部の設立が承認された場合発起人代表者は一月以内に支部設立総会を招集し、第四条の書類を承認して支部を設立する。支部の設立並びに右書類は「会報および山岳」に発表する。

第三章 運営

第七条 支部には支部役員として支部長一名、委員若干名及び会計監事二名以内をおく。

第八条 支部役員は支部会員総会で支部会員の中から選挙する。委員は互選により常務委員を選出する。

第九条 支部役員の任期は支部長三年、委員一年とするが、重任を妨げない。

第十条 支部の経費は支部会員より徴収する支部費その他の収入をもつてあてる。

第十一条 支部の会計年度は毎年

四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。

第十二条 支部長は毎年一回以上支部総会を招集し、事業報告も、会計報告、事業計画及び予算の承認を得、支部役員の改選を行うものとする。支部長は右事項を毎年四月三十日までに会長に報告するものとする。

第十三条 支部は支部会員三分の二以上の同意により解散すること出来る。

第十四条 解散時の会計決算については支部解散総会の決議により支部役員の責任において処理するものとする。

第十五条 支部が次の各号のいずれかに該当する場合に会長はこれを役員総会の審議に附して解散させることがある。

一、支部が本部の目的に反した事業を行つたとき。

二、会計処理上不都合あるとき。

三、必要な報告を全く怠つたとき。

四、支部会員数が定数以下に甚しく減じ当分増加の見込みがないとき。

第十六条 会報一〇八号(昭和十六年八月)所載「日本山岳会支部規定」及び会報一三七号(昭和二十一年三月)所載「日本山岳会支部規定案」は本規定の実施により廃止する。

▽五百円	吉田 竹志
累計参万四四百円也	
図書基金寄附	
▽二万円	(敬称略) 日大遭難委員会
▽七千円	中野 征紀
▽四百円	大井 正一
▽二百円	三井 啓祐
▽百円	三井 松男
累計四万四千九百円也	
図書寄贈	
カラコラム(藤田和夫、林田重男編、朝日写真ブック)	(敬称略)
わがエグゼレスト(ヒラリー著、松方三郎、島田異訳)	朝日新聞社

マナスル登頂祝賀会

恒例の新旧役員懇談会は五月十八日ルームで開くことにしていたところ、この日の早朝マナスル登頂の報が伝えられ、夜のルームはマナスル登頂祝賀会と変わり、続々とどけられたウイスキーや日本酒で別宮会長以下新旧役員その他有志会員一同大いに氣勢をあげ午後九時すぎ散会した。

昭和三十一年五月廿五日発行

マナスル登山隊寄附

(敬称略)

▽四千円	増田 繁雄
▽参千円	日高 信六
▽千円	桑本 澄雄
▽千円	木下 是雄
▽千円	本多 紀元
▽五百円	橋爪 辛達

発行所 社団法人 日本山岳会

編集者 山崎 安治

頒価二十円 電話神田(25)八九五二番 振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂